

私の父は終戦の約半年前、私があと1か月で3歳になる昭和19年11月に召集令状により満州に赴き、終戦の1か月前にロシアに近いチチハルというところで戦死してしまいました。

父が磐田駅から出征するとき、私は母の背中で眠っていました。すると私の横にいた、父の姉であるおばさんが私のほほをたたいて大きな声で「お父さんが戦争に行くんだよ。お父さんの顔をよく見ておきなさい。」と言いました。耳元で余りの大きな声に目を覚まし、父の最後の顔を見ることができました。その時の父の顔はぼんやりしていましたが覚えています。この磐田駅での情景は私の夢に何度か出てきましたが、父の顔はいつもぼんやりしていて、ピントが合うことはありませんでした。

戦争が終わって2年ほどたった昭和22年、戦没者の「遺骨返還式」というものがありました。母から「お父さんの骨が返ってくるから、あなたが代表でもらいに出なさい」と言われ「お父さんの名前を呼ばれたら大きな声で返事をして前に行ってもらってきなさい」と言われました。私は小学校へ入学する前の年で、みんなから「学校では名前を呼ばれたら大きな声で返事をしなさい」と言われていたので、大勢の人の前で返事をするのがうれしくて、そしていい洋服を買ってもらったのもうれしくて、にこにこしてその日の朝母と家を出たことを覚えています。100人ほどの前で大きな声で返事をして、20cm四方ぐらいの四角い木の箱をもらって家に帰りました。

家では家族全員が待っていて、最初におじいさんが木の箱を開けて中を見ました。続いておばあさんが見て次には母が見ました、母の次は2人の姉が見て最後に私が見ました。中には父の名前が書かれた紙が一枚あっただけで他には何もありません。

私は父の髪の毛でもないのかと箱の四隅をじっくり見ましたが何もありませんでした。私が一生懸命に箱の中を見渡すので、家の人々はみな苦笑いをしていました。返還式ではほとんどの人が箱の中は紙一枚だったそうです。遺骨もないのになぜ返還式をやったのでしょうか。それは「死亡通知と書かれたはがき一枚で、戦死したのだからあきらめてくださいと言われても、はがき一枚ではあきらめきれない」という遺族の要望、心情に沿ったセレモニーだったと思われれます。

## 遺児として歩む

磐田市遺族会 増田努

父の戦死公報を受け取ってから大変で、私は母に苦労して育ててもらいました。幼少の頃は母の兄夫婦によくしていただきました。名古屋市南区に借家(共同便所・銭湯通い)住まいで、私は昭和34年中学を卒業すると町工場で工員として働き、夜は定時制高校(機械科)に4年間通いました。母も工員として働いておりました。昭和34年秋には伊勢湾台風にも遭遇しまして、1ヶ月ぐらい別々の会社の寮にお世話になりました。

私が転職、昭和40年に静岡県磐田市に転勤となり、1年半後母を呼び、磐田市に籍を置きました。結婚して、私達夫婦は共働きをしておりました。母には孫2人の子守をしてもらいました。

昭和50年に現住所(県営住宅団地内)に入居しました。敷地が南面に隣接した道路より1.5m高いので見晴らしが良く、母の部屋は南面、東面に位置しており、南面窓からは今も変わらない田園風景です。また、北面の玄関を出るとバス道路で50mの位置にバス停があり、便利がよかったです。

数年後、母は磐田市遺族会の地区婦人部の役員として務めておりました。

2人の孫も結婚して出た後は、3人での生活が続きました。その中、3人で国技館での大相撲観戦・北海道定山溪温泉(二泊)旅行と、少し孝行できて良かったと思っております。

母は88歳、89歳と2回足を骨折して要介護一となり、施設(デイサービス)にお世話になりながら自宅介護で一緒に生活をしてきました。その母(97歳)を父のところへ平成28年に見送りました。タンスの中に保管整理されていた十枚の軍事郵便ハガキと数枚の写真がありました。一枚の文面に「努」が一人で起き上がることができるようになったことを知った喜びが書かれていました。

現在家族は、孫2人、ひ孫4人で、最初の孫に父の一字をもらい治代と命名しました。年3回は家族でつどい家族の絆を深めています。

最後に私、磐田市遺族会において役員を務めておりました折、日本遺族通信を何回も拝読し、私も機会が出来ましたら、父が昭和20年7月(29歳)に眠っております、フィリピンミンダナオ島ダバオの慰霊友好親善訪問に参加したいと常々思っておりました。それが、2回(平成29年度・平成31年度)参加させて頂きありがたいと思っております。

[参加しての記述]

・平成29年度 遺児参加者13名 平成31年度 遺児参加者18名

- ・フィリピン内にある島の小学校に学用品・帽子・衣類等を持参して訪問した折、縄跳び・長い縄跳びを皆さんで喜んでくれまして、すぐに私達とも遊びました…
- ・ミンダナオ島ダバオの慰霊碑に参拝するときに、私達のバス内に地元警察官（2名）が私服で警護にあたってくださいました。
- ・平成31年度は、各班（全6班）に看護師一名が付き添って頂き安心でき良かったです。
- ・ルソン島マニラ市に連泊して、比島戦没者の碑があります「カリラヤ」に訪問団全員が移動しまして、フィリピン大使館職員出席のうえ全戦没者追悼式を行い、式終了後各班の集合写真撮影がありました。
- ・全体を通して温かく配慮された7泊8日の日程であり、同じ境遇の皆様方と一緒に参加でき、父との関係が近くなった感じを持ちました。日本政府・フィリピン政府・日本遺族会には心から感謝をいたします。
- ・今日の日本の平和と豊かさは、数多くの英霊の方々の賜物と感謝に耐えません、ありがとうございました。

### 戦中戦後を生きる

### 磐田市遺族会 伊藤三喜男

昭和16年、名古屋の運送会社に勤務していた長兄は、勤務先から直接豊橋の部隊に入隊し、その後「支那事変」に参入し、中国大陸各地を転戦、幸いにも昭和20年末無事帰国しました。

次兄は、浜松駅駅員でしたが徴兵され、昭和19年1月10日、現地教育ということで広島に集合、そのままフィリピンに送られ、終戦の時、ミンダナオ島で戦死したとの報せを受けました。

私は次兄を広島まで送って行きましたが、船が港を出る時の様子がかすかですが覚えています。次兄とは川遊びや魚釣りなど一緒に過ごした時が多かっただけに、その死は残念です。

私も、次兄を広島に送った9日後、昭和19年1月19日（当時17歳）陸軍士官学校に入校しました。約1年間軍人としての一般教育を受け、その後兵科が航空と決まり航空士官学校に移りました。昭和20年8月9日、飛行機の操縦訓練を満州（現中国東北）で受ける為舞鶴港を出港、5分程航行して触雷、幸い未だ外海に出ていなかったため、船首を岸にのし上げ、船尾だけの沈没で全員無事、その後次の船を待つ間、京都府福知山市に居ました。

8月15日、ラジオで天皇陛下の終戦の放送を聞きました。終戦など夢にも

思わなかっただけに、ただ呆然として声もなく、その場に立ちすくむばかりでした。

翌日、福知山市から帰校、8月21日学校閉鎖で私達は復員することになり、豊浜に帰って来ました。

昭和16年12月8日に始まった太平洋戦争は、私が士官学校に入校した昭和19年1月頃には既に敗色濃厚となり、兵科が航空と決まった時には、東京や大阪などの大都市は勿論、中小都市まで戦禍が拡がり、やがて原子爆弾が広島、長崎に落され、昭和20年8月15日終戦となりました。

この間軍人は勿論、一般の人達も沢山命を失いました。航空士官学校の卒業生も敵機と戦い、最後には特攻機に乗り、殆どの人達は帰らぬ人となりました。

私達在校生も飛行機の操縦技術を身に付け次第、特攻隊員として出撃することになっていました。

死を覚悟した1年7ヶ月の生活は、19歳から95歳になる現在までも、私の人生観に大きな影響を与えています。

太平洋戦争が終わり、私達日本人は多大な犠牲の上に、77年の年月、平和を願うその為の努力をして来ました。

この間、世界の各地では紛争が絶えまなく行われて来ましたが、今回のロシアとウクライナの戦争は、平和を願う私達に大きな衝撃を与えました。

宗教の違いや主義の違いがある限り、この地球上から戦争は無くならないのでしょうか。

## ビルマの父

## 磐田市遺族会 村松初江

「孫の父親が戦地から帰ってくれば、わしはいつ死んでもいい」と日夜神仏に祈っていたという祖父のことは、これまで何度聞いたことか。

父は昭和18年に召集され、20年に終戦。戦後無事帰還する人々がいる中、何の音沙汰もない。別れたときは1歳だった孫も日増しに父親似となり、帰ってきたら抱かせてやりたいと首を長くして待っていた。知らせは2年半後に、紙切れ一枚の戦死の公報でした。祖父の痛手は深く、その夏59歳で逝きました。

戦争が奪うものは、戦った人の命だけではありません。今は2人同じ寺で眠っています。

戦後の母と子の生活は苦しく強風の連続でした。まずは住。住む所がなく知人の長屋、母の実家を転々と。どんな小さな家でもいい、自分の家が欲しいと、

私が夢に描いていたと母は後に笑って語ります。

夢の一つでもあった父の眠るビルマへの慰霊の旅が実現したのは2000年のことでした。

「お父さーん。お父さーん。お父さーん。」

右手の拳をぐっと握り、空に届けと叫んでいる。生まれてから呼んだことのない父に向かって、抱かれた思い出もない今は60歳を過ぎた子どもたちが。旧ビルマへの慰霊巡行で恒例の「お父さん三唱」。次にそれぞれの遺族が石碑や仏像に追悼の言葉を捧げる。夫が言葉に詰まれば、妻が背中に手を添えて励まし、妻が思いを語れば、夫がそっと眼鏡を外す。

私は母のこと、入院のことも話せた。次に母の好きなオカリナを聞いてほしいと吹こうとしたが、どっと出る涙と緊張で手が震え、指は宙を舞い、音を出すことができなかった。

1月末のビルマは乾期で、広大な野原は土埃が舞い、緑の大木も草木も黄土色となり、人々はその中で静かに暮らしている。質素な家屋からは想像もつかない黄金のパゴダ（寺院）が並び、水を掛け花を替える参拝客が絶えることはない。

#### 「永遠に生きる母の愛」より一部抜粋 磐田市遺族会 加藤なを江

昭和13年、年の瀬を迎えた12月、既に入隊している父の後を追って当時4歳の私は、26歳の母と共に満州もソ連との国境にある、密山県東安省西東安という所に行きました。見渡す限り白い雪におおわれた原野に点在する15、6軒の官舎、家族といえは私達を含めて3軒、遊び相手は“兵隊さん、”という誠に淋しい所でした。

20年8月8日のよく晴れた朝、その日はいつになく飛行機が騒がしいのです。見ると日の丸ではなくソ連の戦闘機でした。学校に行くと朝礼の時間にもかわらず、教師達は軍部の人達と職員室で会議中。まもなく校庭に現れた校長先生は、生徒に「ただちに家に帰りなさい」との指導。帰宅すると、2時間以内に駅に行くように！軍部からの避難命令、国境の地故、ひとたびソ連との戦争が始まればいちはやくそこは修羅場と化すからです。

数10人の女子供と50近い男性の団長と副団長の2人の引率で、同じ列車に乗り込んだのです。軍人軍属の人達や開拓団の男達は、無人の官舎の後始末とソ連との開戦に備え、軍隊に残ることになりました。

発車のベルが鳴った時、見送りのため急ぎよ軍隊から駆けつけてくれた父は

「母さんの云うことを聞いて達者で暮らすように」との言葉を投げかけてくれましたが、これが父との永遠の別れになろうとは、神ならぬ身の誰が知り得ましょう。

汽車は、無情にも行く先決まらぬ疎開地へと旅立ったのでした。母 34 歳、私 11 歳、妹 5 歳、弟 3 歳の真夏の午後 2 時の出来事です。

列車の中は、誰もが不安な心持で話し声さえありません。やがて夜になり静寂な闇を貫く大音響に車外に目を移すと、ソ連機からアラレのように投下される焼夷弾と、暗黒の夜空を焦がす紅蓮の炎だったのです。

この時初めて戦争の恐ろしさを知りました。止まったり走ったりの列車に乗ること 1 週間。吉林省の駅に着いた時です。ラジオから流れる天皇陛下の終戦を告げるお声を、耳にしたのは…

しかし、それからが私の本当の戦争だったのです。

「ソ連兵が進軍して来て殺されるかも知れない」「特に若い女性は気を付けた方がいい」など噂が乱れ飛び、私達の団体は山奥へ山奥へと避難しました。

母が寝袋を背負い、炊飯道具を持ちながら妹の手を引き、私は弟を背に毎日何 10km の道を歩く。食事時は川の水でお米をとぎ、石ころを並べてカマドを作り、飯盒で炊くのです。おかずは野草を摘むか、開拓団の人達で作った今は主のない畑の作物を頂戴する。味付けは塩、夜は作業小屋に泊まったり、野宿をしたり、8 月も半ば過ぎとなると夜は冷えます。木の葉で寝床を作り、木の枝を取って掛布団代りで休みましたが意外と暖かいものです。

こうして 4、5 日の旅を続け、山の中の部落の小学校に落ち着きましたが、夜になると、暴行するように現れるソ連兵の銃声に若い女性達は怯え、娘であろうが人妻であろうが、頭を丸め顔にスミを塗って男装をするが、若い女としての匂いは隠す方法もなく連れて行かれます。

「ここにいってもソ連兵に驚かされるならば、いっその事、街へ出よう」「日本へ帰る時、取り残されてもいけない」とふたたび吉林市へと戻るのです。

私達は吉林で一番大きい陽明中学校の講堂に落ち着くことになりました。

大きな講堂は避難してきた人達であふれ、私共親子 4 人には 2m 四方の場所があたえられました。が、トイレに立つ以外は火鉢を囲んで寝るだけの生活です。共同の勝手場は校舎の軒先。冬は火鉢の炭火の上に飯盒を載せ炊いたり煮たりです。

しかし若い女達にとって、ここも安住の地ではありません。夜ごと、銃を持ったソ連兵が女を求めに来るからです。逃げ惑う女の人を大声でどなりつけて

は否応なしに連れて行く。

その人を救おうと自ら身を投げ出す売春婦の人達を見るのも日常茶飯事でした。

身代わりになって連れて行かれる後姿に、どれほど多くの人々が感謝の目で見送ったことでしょう。

又こんな光景にも出会いました。私達親子は講堂の広間にいましたが、なにやら舞台の上の方でうめき声が出たかと思うと「オギャア」という泣き声。赤ちゃんが生まれたのです。皆の注目の中で…しかし、この赤ちゃんも母親の栄養失調にお乳が出ず、生後5、6日で亡くなってしまいました。

乳児ばかりではありません。2、3歳以下の子供の多くは毎日のように1人2人と亡くなっていきます。2月で3歳になった弟が生きているのが不思議でした。

家を出て半年にもなると持参金も乏しくなり、お風呂へ入らないのでシラミが湧き、皆、骨と皮ばかりの姿です。母は自分は少しの食事でも過ごし、私達子供に多くを与えてくれました。そして、とうとうお金が底をついてしまいました。2人は大福餅を仕入れ中国民家に行商に行くことにしました。

こうして売り歩くうちに「子守に来てくれ」という中国人に出会いました。中国語は片言しか話せない私を他家に出すのに母は反対でしたが、「私が食べる分を、お母さんに食べてもらいたい」との願いで自分から進んで子守に中国人の家に住み込んだのです。2月も終わりの頃です。

母は3日置き位に行商をしながら尋ねて来てくれました。けれども、3日置きに来てくれた母が4日過ぎても来てくれません。そして5日目の朝ものすごく胸騒ぎがしたのです。もしかして母が…と思うと居ても立ってもいられず御主人にお願いして母の所に送ってもらいました。

思ったとおり母は横になっていましたが、その容姿はいたいたい程やつれています。妹と弟は相変わらず火鉢を囲んでいましたが、しばらくぶりを見る姉をうれしそうに迎えてくれます。その日の夜中、何気なく目が覚め、私は薄暗い中で母の姿を求めたのですが、南向きで寝ていたはずの母が1人北向きになっているのです。不審に思い声をかけたのですが、返事はなく「おかしなお母さん」と思いつつ南向きに変え朝を迎えましたが、驚いたことに母は目を大きく見開いたまま、一言も云えぬ植物人間になっていたのです。今にして思えば恐らく銃弾に傷つき動けなく一人取り残された父の身を案じ、ショックの余りそのような状態になったのでしょうか。

「物を云わなくてもいい、死なないで、死んではいや！生きていて欲しい」と何も云わぬ母への切なる願いも空しく、3日目の4月28日午後9時頃から、母の胸が大きく波打ち始めました。9時15分、私達姉弟の見守るなか、母は静かに息を引き取りました。享年35歳。

母にすがって泣く私の姿に、それまで茫然と眺めていた妹や弟も事の重大さに気がつき泣き出しました。周囲の人達も気が付いたように声を掛けてくれず。

呼べど応えぬ冷たい母の胸に泣きじゃくる妹や弟の姿を見て思いました。「私が泣いてはいけない。今泣いている場合ではないのだ。私達には明日がある。明日を生きることを考えねば…」と。

死んでも尚大きく見開いた母の目はなかなか閉じてくれません。幼い愛し子を異国の地に残して逝かなければならない母は、死ぬにも死ねなかったのでしょうか。

「お母さん、私達の事は心配しないで」と云いながら、何回も何回もまぶたを撫でてあげることによってやっと目を閉じてくれました。周囲の方のお世話になりながら、母の遺体は吉林の山中に埋葬されました。

もう2度と来て手を合わせる事のないこの土地に…それを思うと、涙はとめどもなくあふれます。「お母さん、さよなら」と最後の別れに合掌しました。

母の死から1週間後、街で母の友人に出会いました。一部始終を聞いてくれた。その人の紹介で、北海道出身の吉林市内に自宅を持つが子供に恵まれぬ吉本さんという民間人に、弟は養子としてもらわれて行くことになりました。日本へ帰って、父が無事復員して来た時は必ず返してもらう約束で。母に死なれ弟までいなくなった私達の淋しい生活が始まりました。

6月も半ば過ぎ、私達の団体に移動命令がきました。少しずつ日本へ近づくように吉林から新京へと向かうことになりました。

新京の街に幾日滞在するかわからない。またもや生活への不安におびやかされました。でもよくしたもので、収容所へ入って半日もたたないうちに子守に来てくれないか？という中国人が見えたのです。妹と2人集団から分かれ、中国人と一緒に馬車で2時間位の所へ連れて行かれました。

半月ほど過ぎた頃です。午前10時頃になるとすごい胸騒ぎがしました。母が亡くなる前と同じように痛く苦しいのです。私は御主人に「収容所へ連れて行って下さい」と頼み荷物をまとめ、妹と収容所に着いたのが午後3時過ぎ。校庭で最後の人が身分証明の写真を撮っている最中でした。「連絡先がわから



ず困っていた」というのです。なんと不思議な事でしょう。もしこれに間に合わなかったら、今頃私も中国残留孤児の一人として悲しい想いをしていたでしょう。

新京を出て奉天を通過。営口という港から1週間の船旅を続け、7月26日博多港へ…ここで4日間滞在、弾む心で手にした浜松行きの切符、車内は引揚者や買出しの人で満員です。夕闇せまる6時半頃、人並みでごったがえす浜松駅に到着。袋井の駅で降りたのが7時過ぎ、袋井派出所から豊浜の役場へ、役場から祖母の待つ我が家へ…。連絡はスムーズにいき、迎えに来てくれた叔父、叔母と一緒に帰って来ました。

それにしても不思議です。母が亡くなる前と、新京で移動命令が出た時のあの胸騒ぎ、一度ならず二度三度。混雑する浜松駅では妹と2人迷子になっていたかもしれません。母が私達姉妹を見守ってついて来てくれたとしか思えません。我が身は滅びても、我が子を思う母の魂は永遠に生きていることを痛感しました。

このようにして、あの人、この人のお陰で当時17歳だった叔母と57歳になる祖母の待つ日本に引き揚げて来ました。私さえ日本に帰って来なければ祖母は父の妹、私には叔母にあたるその人の世話になり、余計な苦勞をせずにすんだのではないかと背を丸めて働き通した祖母の後姿に、手を合わせたものです。

戦後10年、それまで行方不明という名のもとに父の存在に僅かな希望を託しておりましたが、「昭和20年8月16日吉林の山中にて死す」との公報が30年8月に我が家に届き、息子の安否を気遣う祖母と、父の帰りを今日か明日かと待つ私達姉妹の望みも空しく、ついに断られました。

そして時は流れ、48年9月ふとしたことから弟の消息を知ることができました。約30年ぶりに見る弟は体格のよい一児の父親となっておりました。満州での悲しい別れが脳裏に焼きついていた3歳の弟はこれでようやく大人になり、私の心の中での戦争に終りを告げました。

## 非業の死

磐田市遺族会 米津幸男

私は物心ついたころから1年に一度、我が家の仏壇にお参りに訪れる人たちのことを覚えています。小学校に入る頃、その方々はフィリピン東方の海で戦死した芳太郎おじさん（父の弟）の命日（11月13日）に訪れるということをも母より聞きました。しかし、昭和36年、私が中学生になると、毎年訪れていた人たちも減り、いつしか一人だけになっていました。その方はおじさんの最

後を見届けた戦友の梨子田実さんでした。

戦前、現在の自衛隊浜松基地の中に陸軍飛行学校があったことをご存知の方はもう僅かかもしれません。戦局が極まりつつある昭和19年、陸軍飛行学校は教導飛行師団へと名前が変わり、攻撃と教育研究を行う飛行部隊がおかれました。同じ年におじさんは陸軍航空士官学校を卒業すると、10月には急きょ編成されたばかりの陸軍特別攻撃隊「富岳隊」の隊員に命ぜられて浜松からフィリピンのルソン島に向かうことになりました。特攻機といっても海軍の神風特攻隊のゼロ戦（戦闘機）とは異なり、陸軍特別攻撃隊は複数名が搭乗する重爆撃機を改造したものです。しかし、この特攻機は飛行機の機体から銃器は外され、爆弾は落とせない構造にして、搭乗する人間を飛行機もろとも敵の軍艦へ体当たりをさせる非人道的なものだったのです。

「昭和19年11月13日、ルソン島東方の海上に敵の艦隊を発見、富岳隊は必殺攻撃により、これを撃滅すべし…」午後3時、富岳隊に出撃の命令が伝えられ、攻撃隊員13名は飛行場に整列し壮行の乾杯がおこなわれ、すぐに夕映えの空に向けて出撃しました。おじさんは、無線の係として五機編成のうち、隊長が操縦する一番機に搭乗しました。めざす敵艦がいる海上に近づいたときに突然、雲の下から20機ほどの小型飛行機の編隊が飛び出し、艦隊からは高射機関砲から打ち上がる赤い炎が飛び散り、おじさんの乗っていた特攻機は体当たり直前に6,000m上空で撃墜されてしまいました。この目撃談はエンジンの不調で基地に戻った戦闘機の隊員の口からもたらされたのでした。その時の「18時2分、空母発見。体当たり」とのおじさんの打った最後の電文が飛行基地に届いていたそうです。

翌日の大本営発表では「特別攻撃隊富岳隊はルソン島東方の敵艦隊を攻撃し、戦艦一隻を撃沈せり」として、特攻隊の戦果は新聞やニュースでも大々的に報道されました。新聞の見出しには「陸軍特別攻撃隊 戦艦を撃沈 郷土の勇士に続け」などと一夜にして英雄的な存在として扱われていました。

おじさんは3人兄弟の末っ子に生まれ、母親のお腹にいた時に父親を亡くし、貧しい生活の中を母親一人で育てられたので、人一倍母親思いのやさしい少年であったそうです。

特攻隊員として出撃する薄暗い朝に、機関係の梨子田さんは戦闘機が並ぶ飛行場を歩いていると、尾翼の下に体をもたせるようにしてむせび泣いている人影を見ました。それは、いつも元気なことを言っていたおじさんの後姿でした。梨子田さんは慰めようもなくその場を立ち去ったそうです。おじさんはたった

26歳の短い人生を国に捧げたのでした。

父親からおじさんのお話を聞くたびに私は子どもながら「なぜ断らなかったの?」「なぜ逃げなかったの?」「こんなに人が悲しむ戦争をなぜやるの?」と次々と疑問が湧いてきました。太平洋戦争末期における陸海軍4,000名を超える特攻隊員の非業の死と、その若者を取り巻く人々の悲しみを決して忘れてほしくありません。そして、日本人は2度とこの人間を兵器と化して特攻隊員を戦争へ送り出す思想とシステムを生んではいけないと思います。

私が今を生きている若者の皆さんへ伝えたいこと、それは、たった一度だけの自分の人生を大切に生きてほしいと思っています。若いうちにいろいろな本を読み、あちこちを旅して、多くの友達を作り、異なった文化に触れて、様々な生き方や考え方があることを学んでいただきたいと思います。そして、誰もが一人の人間として尊重され、幸福を感じられる社会を実現することこそが平和への近道であることを私は信じています。

(令和3年磐田市平和祈念式「追悼のことば」より)

## 母の遺稿

## 磐田市遺族会 市川勝己

旧豊田町戦友会が遺族の思い出を集めて「いしずえ」を刊行したのは昭和50年でした。母がいしずえに寄せた手記を私なりに要約致しました。

昭和18年10月2日臨時召集を受け取り静岡中部第3部隊に入隊。当時長男3歳、長女1ヶ月の可愛い盛りの子ども2人を残しての出征。人一倍子煩悩だった主人の気持ちはいかばかりだったか。その2ヵ月後好物のおはぎを作って面会に行った。「大きくなった。大きくなった。」と涙を流して喜んだ顔が今も目に浮かぶ。翌昭和19年7月18日マリアナ諸島方面にて戦死。「お父さんが帰ってくれば」の支えを失って寂しさと失望は言い表せなかった。

その頃にはB29の不気味な爆音におののき親子3人肩を寄せ合った狭い防空壕の日々。配色濃くなった6月遺骨が届き、8月には村葬をしていただく。4年という短い結婚生活だったが優しい夫との楽しい思い出だった。やがて子どもも成長して孫に囲まれ楽しい日々を過ごす。ある日孫が言った。「おじいちゃんも横井さんや小野田さんのように帰ってくるといいね」と。私もそんな夢をみている。

戦死した人たちは「自分が犠牲になるから、将来どんな事があろうが戦争だけは絶対にしてくれるな」との思いで散っていったと思います。私たち遺族はそうした英霊の思いを後世に伝えなくてはならないと強く思います。

## 戦後 77 年平和の俳句

磐田市遺族会 磯部節子

1945 年、敗戦後、満州（現中国東北部）から日本への引揚が始まった。4 歳の少女、夜の暗い甲板に立ち小さな手を合わせて何かを祈っていた。毎夜のように衰弱し亡くなってゆく幼子、赤子、その水葬が始まる。母親も体力がなく、お乳の出ないお母さんに抱かれ、はかない命を目の当たりにしながらの引揚船でした。雑穀と芋のつるが入った食事は、私も消化出来ず日毎弱ってゆきました。明日の朝まで持つ事が出来るだろうか？今宵、命を落とすかも知れない？最後の食事としてふるまわれたのが「白粥」でした。かすかな塩味だったような記憶、最高のごちそうでした。白粥を頂き寝た私は何とか命をとりとめ、日本の地を踏むことが出来ました。重爆機のパイロットの父は昭和 18 年 12 月 26 日、南方ニューブリテン島での激戦にて、28 歳の命でした。白粥は今も命の絆と思っています。

白粥に命もらひし帰燕かな 戦後 73 年

茹で玉子今朝も輝く平和かな 戦後 74 年

夏野菜天ぷら溢る平和かな 戦後 75 年

終戦の日に一日限定で復活した「平和の俳句」（中日新聞掲載）。私の想いは今日の平和への感謝を詠みました。戦後の間もない小学校時代、給食は 6 年間ありません。

低学年の頃、お弁当を持って来られない少年、そっと教室を出て校舎の片隅にいた事、今でも覚えています。

茹で玉子は昔も今も輝いています。

親戚の家でさつま芋の天ぷら大皿に溢れんばかり、目を見張るごちそうでした。

竜洋遺族会で靖国参拝後に訪れた「霞ヶ浦航空隊、予科練記念館」。映像、写真、あどけない面影を残した少年達の姿、少年のある日記？の中に夢は「ぼたもち、お汁粉他、甘い物を食べたい」希望がありました。館内では皆、涙が止まりません。

2 度とこの様な事があってはなりません。

現在の平和に感謝しつつ残りの人生を穏やかに。

## 三ヶ根山の思い出

磐田市遺族会 大橋洋子

初夏、あじさいの花が美しく咲く頃になりますと、毎年なつかしく思い出すことがあります。それは、私の群馬県出身の戦死した父の、日本に無事帰国された戦友の皆様と、平成11年の6月に蒲郡市外三ヶ根山頂の鎮魂碑前で東通会トーツーカイ主催の行われた碑前式に初めて参加した時のことです。

東通会とは、全国から集まった若者達が、磐田のかぶと塚にあった建物で、通信隊としてツートト、ツートトの信号等通信を学んだことにちなんでつけられたと聞きました。第二十四師団通信隊として共に戦地で苦勞された方々が、戦後、全国に散らばった仲間に会いたいという切なる思いで連絡しあい、何年もかけて捜し続け、やっと昭和43年11月から全国大会にこぎつけ、持ち回り制にして各地で開催されていたようです。

平成11年に八十路の坂を越え、体調を崩される人も数多く出てしまい、区切りにするという時でした。私は、父が通信の勉強の合い間に浜松へ遊びに行ったりしていた時に、当時、少年兵でかわいがっていたという村松敏郎さんが私を捜し、嫁ぎ先までおいでくださり、「春山勇喜さんの嫁さんをみんなに会わせたい。」というありがたいお話で、喜んで参加いたしました。

三ヶ根山には沖縄から北海道まで130名余り、大勢の家族も加わり、大型バス2台で集合というにぎやかさで本当にびっくりいたしました。車椅子ではせ参じた方もあり、きずなの強さに感動しました。

戦死した父は、門司港から母のお腹にいた私、祖母に見送られて出征し、台湾バシー海峡で米軍の攻撃を受け、親州丸と共に海に沈みました。三ヶ根山には、仲間の船に助けられた方も参加されており、万感の想いで私の手をにぎって喜んでくださいました。三ヶ根山頂からのながめは、はるか南方の景色によく似ているようで、じっくり眺めている皆さんがまぶしくうつりました。生きている喜びを感じていたのでしょうか。

碑前式はおごそかに、帰国してから神職になられた方の進行で、身の引き締まる思いがしました。最後に、音楽が流れ“海ゆかば”の歌を全員で歌いましたが、涙をぽろぽろ流されている姿に私も涙がほおを伝い、今でもその光景は強く心に残っております。三ヶ根山頂には、浜松出身の俳優・鶴田浩二さん達が建立した碑もあり、戦争にまつわる、あまり知られていない殉国七士の碑もあり、考えさせられました。

三ヶ根山頂を去る時に、戦友の皆様との出会いを感謝すると共に、東通会の皆様がもらった命を、地元で、世の為人の為につくそうという気持ちで、これ

から生きるというお話を伺い、私もささやかな平和な暮らしを願いつつ、現在も遺族会に協力し、過ぎ去りし人々の出逢いをなつかしく思う今日この頃です。

### 知らなかった伯叔祖父の戦争参加

磐田市遺族会 森口雅博

先日、祖父の兄弟が亡くなりました。その葬儀の準備で親戚と故人の生い立ちを書き留めている中で、故人が召集令状を受け取り、家族で見送りをしたと話を聞きました。祖父が戦地であるニューブリテン島に派兵され、幸運にも赤痢による戦線離脱で命が助かったことは聞いていたのですが、他の親戚の戦争体験の話を聞くのは初めてでした。

後で詳しく聞いてみると、祖父母、曾祖父母の代の男性の半数の8名が召集され、その半数の4名が戦死していることを知りました。当時、働き盛りであった男性親族の、ほぼすべてが召集を受けたのだと思います。文字通りの「国民総動員」であったのだと感じるとともに、戦地に向かうことになった方が、命を落とした方が、自分の身内にもこんなに多くいたことに驚かされました。

私と同じ40代以降の人間は、どれだけの親族が戦争に赴き亡くなったのか知らない方がほとんどなのかと思います。私は、身近な戦没者のことを知らなかった自分を恥じるとともに、自分の子供が大きくなったら、戦争に赴きそして戦争によって命を落としたご先祖様の事を伝えていきたいと思います。